

古代のマヤ文化圏と非マヤ文化圏との交流の鍵を握る石造大基壇を発見

名古屋大学高等研究院・文学研究科の市川 彰（いちかわ あきら）特任助教が率いる考古学調査団は、中米エルサルバドル共和国サン・アンドレス遺跡において、^{註1)}古代のマヤ文化圏と非マヤ文化圏の交流の鍵を握る石造大基壇を良好な保存状態で発見しました。

今回発見された石造大基壇は、当該地域では最大規模を誇る南北約 90m、東西約 80m、高さ約 20mの 5号建造物内部にあり、形状は階段状、少なくとも 4段造り、高さ 6mを有します。層位および出土遺物から、紀元後 450～600年頃に位置づけられます。それまでマヤ文化圏の南東端では、伝統的に土製建造物が築造されていました。従って、今回発見されたような石造建造物は異質であり、古代のマヤ文化圏のフロンティア（現在のエルサルバドル西部）では、最も古い時期に相当する石造建造物です。こうした石造建造物の技術や知識は、マヤ文化圏外とされるエルサルバドル東部のケレパ遺跡に先行してみられることから、今回の発見は、古代のマヤ文化圏と非マヤ文化圏の地域間交流の実態解明への貢献が期待されます。

また上述の石造大基壇は、新大陸では完新世最大規模であるイロパング火山の噴火を起源とする火山灰のほぼ直上に築造されています。通説では、この噴火によって現在のエルサルバドル一体に存在した往時の社会は壊滅状態に陥ると考えられています。しかし、今回の発見は通説とは異なり、噴火後に想定よりも短期間で復興した可能性があり、古代マヤ社会の人々の災害対応について検討する資料としても学術的価値の高い発見です。

本調査成果は、平成 28 年 5 月 11 日（日本時間 5 月 12 日）にエルサルバドル共和国大統領府文化庁主催の記者会見にて公開されます。

【ポイント】

- ▶ 古代マヤ文化圏の南東端（現在の中米エルサルバドル西部）^{註1)}において、良好な保存状態を有する石造大基壇を発見した。
- ▶ サン・アンドレス遺跡はマヤ文化圏と非マヤ文化圏の文化要素が交差する地点であった。
- ▶ サン・アンドレス遺跡では、新大陸において完新世最大規模の巨大噴火であったイロパング火山の噴火で罹災後、短期間で再建した可能性がある。

【研究背景と内容】

現在の中米エルサルバドル(以下、エ国)は、古代の文化圏でいうとそれぞれマヤ文化圏(エ国西部)と非マヤ文化圏(エ国東部)にあたります(図 1)。サン・アンドレス考古学調査団は、古代マヤ文化圏の周縁社会の長期的な盛衰過程を解明するべく、2015年2月からサン・アンドレス遺跡で発掘調査を開始しました。同遺跡はエ国西部のサポティタン盆地(面積約550km²)に位置し、紀元後600~900年に最盛期を迎える盆地内の中心的な都市であったと言われています。しかし、これまでの発掘調査と出土遺物の分析によって、少なくとも紀元前600年頃から紀元後1200年頃までにおける長期間の居住痕跡があることが確実となってきました。この間、少なくとも3回の火山噴火の痕跡がみられるため、サン・アンドレス遺跡は火山噴火と古代社会の関係を考古学的に考察することのできる格好のフィールドでもあります。

2016年2月から4月にかけて実施したサン・アンドレス遺跡第三次調査では、当該地域では最大規模を誇る南北約80m、東西約90m、高さ約20mの5号建造物の建築様式、建造物の築造時期と機能した時期の解明を目的として、大基壇部分の発掘調査を実施しました。なぜなら、このような大型の記念碑的建造物は古代マヤ社会の政治・文化・宗教の核であり、往時の社会状況を復元できる情報が集約されていることが多いからです。発掘調査の結果、古い建造物を覆って新しい建造物を造るという古代マヤ文化圏に特徴的な増改築方法が採用されており、少なくとも4回の増改築があることがわかりました。このなかで現在確認できる最も古い時期に相当するものが石造大基壇です。

石造大基壇の全容については今後調査を進めていく必要がありますが、階段状で、4段造り、高さ約6mを有します(図 2)。複数の石材を積み重ねて重厚に築造されています。こうした石造建造物は、土(日干しレンガや泥漆喰も含む)を主体とする建造物が一般的なマヤ文化圏の南東端においては異質なものであり、同様な石造建造物は非マヤ文化圏とされている、エ国東部に位置するケレパ遺跡で確認できます。このことは、土製建造物が中心であったマヤ文化圏の南東端において、石造建造物に関する知識や技術が導入された背景に、非マヤ文化圏との交流があったことが考えられます。

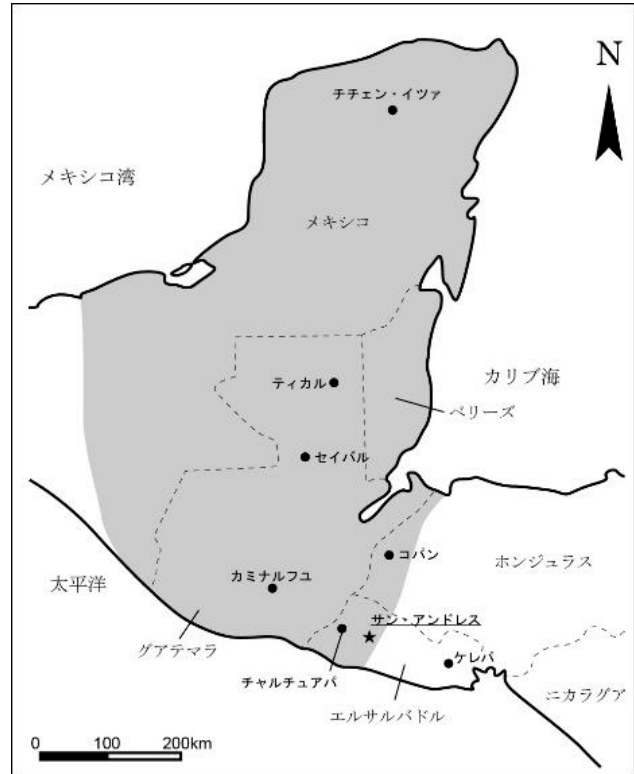


図 1 古代マヤ文化圏の範囲と主な遺跡



図2 サン・アンドレス遺跡5号建造物内部で出土した石造大基壇

上：石造大基壇の最上面、 下左：手前に日干しレンガ+泥漆喰製建造物の一部が見える、
下右：石造大基壇の2~4段目

石造大基壇の築造された時期および機能していた時期については、この基壇が紀元後 400～450 年頃^{註2)}に噴火したイロパンゴ火山灰(厚さ約 40cm)の上層、サン・アンドレス遺跡が最盛期を迎える紀元後 600～900 年の主要建築であった日干しレンガ製建造物の下層にあることから、紀元後 450～600 年の間と考えられます。通説では、新大陸では完新世最大規模と言われるイロパンゴ火山の噴火によってサン・アンドレス遺跡が位置するサポティタン盆地は壊滅的状况に陥るとされてきました。今回の発見は、罹災後、比較的短期間で社会の核となる記念碑的建造物が造られる可能性を示すことから、通説を再考する貴重なデータとなります。

【成果の意義】

今回の石造大基壇の発見によって、古代のマヤ文化圏と非マヤ文化圏の地域間交流の実態解明が進むと期待されます。サン・アンドレス遺跡はマヤ文化圏南東部を代表するコパン遺跡との関係が強調されがちですが、本発見によって同じマヤ文化圏だけではなく、さらに非マヤ文化圏における研究の重要性が喚起されました。また今後の研究の進展によって、さまざまな言語・文化を有する複数の社会集団が交差する周縁地域における歴史のダイナミズムが次第に明らかになっていくと期待されます。

イロパンゴ火山噴火の古代マヤ社会へのインパクトに関する研究に通説を再考する新たなデータが得られた点も重要です。これまでの研究では噴火の負のインパクトを強調する傾向にありましたが、本発見によって、罹災後に比較的短期間で建築活動が始まる可能性があることが示唆されました。これは、噴火災害という困難を克服した往時の人々の姿を素描できる可能性を秘めており、古代マヤ社会の人々の災害対応や災害の記憶といった側面にも考古学からアプローチできるようになるかもしれません。

【用語説明】

註 1) 古代マヤ文化圏

現在のメキシコ合衆国チアパス州、ユカタン半島、メキシコ湾岸の一部、ベリーズ、グアテマラ、そしてエルサルバドル西部およびホンジュラス西部にまたがる範囲で、地域差や時期差もありますが、紀元前 1000 年頃から紀元後 16 世紀頃にかけて、神殿ピラミッド、石碑や祭壇といった石造記念碑が建立された他、文字・暦・天文学などが高度に発達しました。

註 2) イロパンゴ火山の噴火年代

イロパンゴ火山の噴火年代については、複数の年代案が議論されており、まだ研究者間で統一されていません。今回は既存の考古学研究成果や年代測定データから最も整合性が高いと思われる年代範囲を用いています。詳しくは市川他 2015 などを参考ください。

【参考文献】

市川 彰・南雅代・八木宏明 2015 「メソアメリカ南東部太平洋沿岸における先スペイン期製塩活動・エルサルバドル共和国ヌエバ・エスペランサ遺跡を中心に」『日本考古学』40:1-18

【謝辞】

調査はエルサルバドル共和国大統領府文化庁文化自然遺産局の許可・協力のもと実施されました。また本研究は、文部科学省・科学研究費補助金・新学術領域研究(研究領域提案型)平成 26～30 年度「古代アメリカの比較文明論」(代表:青山和夫 茨城大学教授)の研究項目 A02「メソアメリカ比較文明論」(代表:青山和夫、分担:市川彰)(課題番号 26101003)による支援を受けました。深謝申し上げます。